

日本語の再発見

伝統的な綴り

ムーア・ハウスは、『文字の歴史』の中で「伝統的な綴りを発音通りに改めるべきだが、無智な人々の激怒を買ふので実行は難しい」と述べたあとで、「伝統的な綴りを廃止して表音的な綴りを採用することは、アメリカで実現される気配が一番強い。書法の伝統がそれほど重くのしかかってゐないからである」と述べてゐる。

それは、昭和二十一年の事であり、わが国が「伝統的かなづかひを廃止して、表音的な“現代かなづかい”を採用した年」であった。然し、それから僅か十年後には、ムーア・ハウスが「伝統的な綴りが廃止される可能性が最も高い」と期待したアメリカにおいて、ノアム・チョムスキーから、「今まで言語学者の九九パーセントが、伝統的な綴りを改めて発音通りの綴りを採用すべきだと主張して来たが、そんな事をしたら大変だった。伝統的な綴りは、文章を理解しようとする人のためにあるものであるが、発音的な綴りは、意味を理解しようがしまいが、聞いた事をただ再生するためにある」と言ふまでに、徹底的な批判を受けたのは何とも皮肉な事であった。

“one”といふ綴りが、その発音の度々の変化にも関はず、五百年もの長い年月に亘って保持されて来たので、それが“表語文字”的な効果

を発揮し、読み難い表音文字を読み易くしてゐたのである。こんな解り切った事が、チョムスキー以前の言語学者たちには理解できなかったのである。